

2015/7/26 於 ギャラリーよみうり

第1講 世界を動かした二つの銀帝国

植民地時代前半期のポトシ銀山をめぐる市場経済圏の形成

真鍋周三

+++++

目次

はじめに

I ポトシへの物資供給

1. ポトシの政治的経済的支配と商業
2. 太平洋岸およびラプラタ川コース経路による物資供給 (黒人奴隷の供給、  
現アルゼンチン北西部一帯の開発とそこからの産出品を含む)
3. ポトシ周辺部地域からの物資供給
  - (1) アルティプラノの中核—チュキート地方
  - (2) アンデス東部斜面とアンデス西部斜面 (太平洋沿岸部まで)

結び

+++++

はじめに

ペルーやボリビアの地勢は、コスタ (海岸部)、シエラ (山岳部)、セルバ (アマゾン源流の森林部) からなる。「垂直統御」 (= 「アンデス社会の経済における生態学的階床の最大限垂直統御」。物資の生産や補完関係をアンデスにおける海拔高度の次元から生態学的に説明) の考えが重要 (第1図)。

「エル・ドラード (黄金郷)」。

スペイン人征服者たちはインカ帝国を征服。

「アタワルパの身代金」、クスコの「太陽神殿 (コリカンチャ)」において貴金属を入手。本当の意味でのエル・ドラードからの貴金属の入手とは、スペイン植民地支配体制の下で銀鉱山の開発によってもたらされた富。

1545年にアルト・ペルー (現ボリビア) 南部で発見されたポトシ銀山 (第2図)。

新大陸の銀はヨーロッパに流出して「価格革命」や「商業革命」を引き起こす。ポトシの銀はアメリカ大陸内部はもとよりスペイン経由でヨーロッパへ、さらに中東や東アジアにまで達する。

「5分の1税」 (第3図) 未払いの銀塊も流通。

ポトシの山発見のニュースはペルー全土を駆けめぐり、各地から大勢の人々が巨万の富を手に入れようとポトシに流入。

ポトシ山麓に集落 (町) が出現。(ポトシ市の設計・整備は1572年になって改めて行

われた。) (付録 2 付録 3 参照)

やがてポトシは海岸部と結ばれる。大西洋、太平洋を経てヨーロッパや東アジアに向かう大洋横断ルートができて、グローバル化が促進される。ポトシ銀山によせるスペイン王室をはじめとする当局や関係者の思い入れと期待は大きかった (絵画「山の聖母マリア」)。

ポトシは南米大陸における最大級の経済拠点 (地図 1 地図 2 地図 3)。16 世紀末から 17 世紀前半にかけてのポトシ市は: 12 万人 (1572 年) から 16 万人 (1611 年) の人口が密集する西半球最大の都市。

ポトシ市にはさまざまな商品が海外から、また植民地域内から大量に集まり市場経済が浸透。ポトシの開発が始まると、まずアルティプラノ (東西両アンデス山脈の間にある、北はクスコから南はタリハに至る高原地帯) から多くの人や物資がポトシに流入。ポトシに向けて隊商が動き始めた。

植民地政府当局 (副王庁) は早くからインフラの整備に尽力。1555 年にはリマとポトシを結ぶ道路が開通 [「銀の道」「王の道 (幹線道)】]。

クスコ市とポトシ市を結ぶ中継都市としてラパス市が建設される (1548 年) (地図 1 地図 3)。

銀の生産によってポトシ市とその地区は一大消費センターになった。ポトシへの供給品の代表的なものとしては食糧品を主とする必需物資、鉱業に必要な品々や奢侈品があげられる。

ポトシ市の標高は海拔 4070 ㍉。ポトシの山の頂上は標高が約 4800 ㍉。

鉱石採掘は海拔 4000 ㍉以上の高地で行われた。鉱山での労働力をもっぱらミタ制 (賦役/強制労働) に依拠。ポトシにおける鉱山労働はすべてアンデス高地の原住民成年男子 (年齢幅は 18 歳から 50 歳まで) によって担われた。

1573 年、第 5 代副王トレド (在位 1569~81) によってミタ制の再編が植民地政府側から行われた。ポトシ銀山のミタ徴集範囲は、原住民人口が密集していたアルティプラノのうち、北はクスコから南はタリハにいたる、北西から南東方向にかけての「楕円形」空間に位置する 16 地方 (地図 4)。年間合計にして約 13500 人の、原住民共同体に所属する成年男子がポトシ銀山に徴集される (第 1 表)。食糧をはじめとする日用品のポトシへの供給もまたこの一帯から行われた。低地の産品 [例えばココアの葉 (以下、「ココカ」と略称する) やぶどう酒] については、アンデス山脈東西の亜熱帯や温帯低地から供給。

銀の精錬方法が「ワイラス法」 (付録 4) から「水銀アマルガム法」に転換し、銀抽出の工程で水銀が使用されるに至って、ポトシにおける原住民労働者の負担はいちだんと大きくなった。

→ 早期から、原住民がポトシのミタの義務を回避するという現象が起きていた。ポトシに残留する、ミタの義務のない地域や異郷の共同体、白人が経営するアシエンダなどに



移動・移住するという方法。フォラステーロ（共同体を離脱した浮浪の原住民）やヤナコナ（アシエンダ等の専属労働者）として植民地時代史に登場。フォラステーロの規模は時代が進むに従って増大。

以下では、植民地時代前半期のポトシ市場経済圏の形成について、みていく。ポトシへの物資供給を、太平洋岸およびラプラタ川コース経由による物資供給（黒人奴隷の供給、現アルゼンチン北西部一帯の開発とそこからの産出品を含む）とポトシ周辺部地域からの物資供給とに分けて考察していく。

## I ポトシへの物資供給

ポトシ銀山は標高 4000 メートルを超える高地に位置し、気候は寒冷で、周囲は完全に不毛の土地。1545 年にポトシの山で銀が発見されると、その荒涼たる土地に銀を求めて人々が殺到。ポトシから産出される銀は、新大陸はもちろんのこと、西ヨーロッパや東アジアからの関心を惹き付ける。

ポトシの人口は、1572 年には約 12 万人、1611 年には約 16 万人のピークに達する。1550 年代の末頃からポトシの銀は広く内外に流出。ポトシは不毛の地ゆえに、物資はすべて外部から運び込まれ、ポトシには市場経済が浸透。16 世紀末から 17 世紀はじめにかけてポトシの銀生産高は絶頂期を迎えた。

### 1. ポトシの政治的経済的支配と商業

人口 16 万人の内訳（1611 年）：原住民が 76000 人、ヨーロッパ人が 43000 人、クリオーリョ（メスティソを含む）が 35000 人、黒人とムラートが 6000 人。→原住民が 47%、ヨーロッパ人が 27%、クリオーリョが 22%、黒人系が 4%。

ヨーロッパ人の大半はスペイン人であり、その一部がポトシのエリート階層。

政界：コレヒドール（地方行政官）、カビルド（市参事会）のアルカルデ（市長）やレヒドール（市参事会員）、ミタ関係の役職者、書記など。

財界：鉱山業者—鉱脈において採鉱の権利を有する者ならびに精錬所所有主（アソゲロ）〔「グレミオ（精錬業者組合＝鉱山ギルド）」を結成〕、エンコメンデーロ\*、農園主、牧畜業者、商人。（\*エンコミエンダ制とは、新大陸征服の過程でスペイン王室が征服者に一定数の先住民の支配・管理を委託した制度である。エンコミエンダの主はエンコメンデーロとよばれる。エンコメンデーロは配下の先住民にキリスト教を布教し先住民を保護しなければならなかった（義務）。そしてその見返りとして先住民から貢納（税金）や労働力の提供（ミタ）を受けた（権利）。エンコメンデーロは本質的に「事業主」「経営者」である。聖職者がエンコメンデーロを兼ねるケースも珍しいことではなかった。）

聖職者（司教や司祭、各派修道会修道士など）も経済に関与する。

鉱山労働（採鉱・鉱石搬送・精錬）、木材・燃料・木炭・塩の輸送、ろうそく作りなど

の仕事には、ミタ労働者（ミタヨ）や自由労働者（ミンガ）が従事。

ポトシに關与した植民地支配の機関や人々：スペイン国王、インディアス枢機會議、インディアス通商院、ペルー副王、リマとチャルカス両アウディエンシア（王立聴訴院。植民地の行政・司法の最高機関）、コレヒドール（地方行政官）、財務府やカビルド（市参事会）など（世俗権力＝「俗権」）。教権レベルでは、司教や司祭などのセクラール（司教支配と教区組織の設立によってカトリック教会に所属する聖職者）と各派修道会修道士などのレグラール（アンデスの谷間や山奥の村、アンデス東部の熱帯低地など未開発地域にミッション（布教村）を築き、周辺部にいた原住民の布教にあたった）。

スペイン人（白人）にとってポトシ銀山は富を得るには最高の投資の対象。当時、官職保有者の多くが鉱山に投資。→ルイス・カポーチェ（ポトシの鉱山業者で年代記作者）の作成したポトシ鉱山主の一覧表を検討すると、鉱山に関するすべての法務に責任のあった鉱山の判事、ミタ行政官、市参事会書記、鉱山書記、チャルカスのアウディエンシアのオイドール（聴訴官）、ポトシ財務府三役、そして副王トレドの側近として知られるポーロ・デ・オンデガルド（?~1575、ポトシの初代コレヒドール）らが鉱山に投資。

鉱山業者の人生設計は、短期間に稼げるだけ稼ぎ、あとは富を携えて快適な場所に移り住むというもの。一人でも多くのミタヨを必要とした→ミタヨの徴集とその分配に権限を持つ関係役人との癒着や「不正」が拡大。

修道士の動向についての事例。チュクイート地方（[地図 5](#)参照）における修道会としてはドミニコ会とイエズス会が進出。ドミニコ会士は、ポトシへ供給する物資を得るために、カシケ（原住民共同体の首長）を通じて、土地耕作、牧畜、織物製作、輸送などの仕事を原住民に担わせた。ドミニコ会はポトシでは銀山に投資を行っており銀を採掘していた。1567年に7つの村に居住していたドミニコ会士の人数は16人。彼らの財産の規模は、彼らがこの地方において所有していた家畜（リヤマ、アルパカ、羊、山羊）の総数6599頭からその一端が推測される。1人当りの家畜所有数は平均412頭。彼らに提供されていたミタ労働者の合計は60人余り。1567年時点で共同体の牧畜用地や農耕地のいくつかが修道士達に譲渡されていた。

イエズス会は1568年からリマ市を起点にポトシへの進出をはかった。1576年にはチュクイート地方のフリ村に4つの改宗区を築き布教を開始。〔以来、各地に進出。やがてラバの飼育にも手を染める。〕

ポトシに關した商人は内外に存在。例えば、セビーリャやバスクのスペイン人商人、ジェノバ、ポルトガル、ドイツ、フランドルなどの外国人商人。とくにセビーリャ商人が重要。セビーリャ商人（セビーリャにはアメリカ貿易の独占権が与えられていた）は商人ギルド（＝コンスラード）を組織し、新大陸植民地の代理商との商業ネットワーク



を利用して大規模な商業活動を展開。

ペルー副王領レベルでは、リマ商人の勢力も次第に大きくなってくる。

2. 太平洋岸およびラプラタ川コース経由による物資供給（黒人奴隷の供給、現アルゼンチン北西部一帯の開発とそこからの産出品にふれる）

最初に太平洋岸のコースから（[地図1](#) [地図2](#)）。合法のヨーロッパ商品は、ノンブレ・デ・ディオス港（後にはポルトベリヨ港）からパナマ市経由で太平洋岸を南下。リマ市の外港カヤオ港（または南方のイロ港）に運ばれ、そこから陸路でポトシへ。ティティカカ湖西岸のチュクィート地方を経由。

1570年代以降になるとアリカ港を経由するルートも浮上。

フンボルト海流が障害。ペルーにおける舶来品の物価高騰に拍車。

★フィリピンのマニラとメキシコ間の交易（ガレオン貿易）。

1565年にアンドレス・デ・ウルダネタがマニラからアカプルコに至る航海に成功した後の1571年以降のこと。

アジア産の商品（絹や中国産の磁器に象徴される奢侈品）がアカプルコ市場を賑わす。リマ商人の注意を惹く。

ペルーとフィリピンとの直接貿易も1579年頃から始まる。

1582年までに2隻のマニラ船がアカプルコを経由せず直接カヤオ港を訪れ、大量の絹、陶磁器、香料、鉄などをもたらした。しかしこの交易は王室からただちに禁止される。マニラとアカプルコ間の交易の絶頂は1616-1620年。

絹や磁器を主とする東洋産品の密輸は以後も続行。

★ラプラタ川方面。ポトシからラプラタ川経由で大西洋に至る地域への植民活動がアンデス側から始まる（[地図3](#)）。

チャルカスのアウディエシア（1559年成立）により推進。

フアン・ヌーニェス・デ・プラドはポトシから南下し、バルコヤサンティアゴ・デル・エステロに植民。トゥクマン（1565年）、コルドバ（1573年）、サルタ（1582年）、リオハ（1591年）、フワイ（1593年）などへの植民が行われる〔（ ）は都市設立年〕。

コルドバ：ヘロニモ・ルイス・デ・カブレラ（1528~1574）。

パンパへの家畜類の導入。例えば、1567年にフアン・オルティス・デ・サラテ（1521~1576、バスクの貴族家系の出身）はリオ・デ・ラプラタの総督となり、数千頭の家畜をパンパに搬入。

コルドバやトゥクマン地域は商業を通じてポトシと結びつく。

ポトシへのラバの供給。ラバは17世紀を通じてその重要性を発揮。

メンドーサ（1561~62年）、サン・フアン（1562年）、サン・ルイス（1569年）への植民。

現パラグアイ地域の開発は大西洋側から。1541年にアスンシオンが建設され、これを

拠点に多くのエンコミエンダが出現。

1564年、パラグアイ川からチキートス～サンタクルス・デ・ラ・シエラ～チュキサカ～リマが踏破される。1566年、アスンシオンがチャルカスのアウディエンシアの管轄下に。

ブエノスアイレスへの植民：1580年にフアン・デ・ガライ（1528～1583.フアン・オルティス・デ・サラテの甥）による。→ラプラタ川一帯がチャルカスのアウディエンシアの管轄下に入る。

ブエノスアイレスからラプラタ川経由でコルドバ、トゥクマン、サルタ、フバイ、トゥピサ、ポトシを結ぶ交易ルート（[地図3](#)）が成立。

「非合法」ルート。

ラプラタ経由で海外からの商品がポトシに本格的に供給されはじめたのは1580年代以降。

まとめ→太平洋岸およびラプラタ川経由によるポトシへの供給品目は[第2表](#)。

遠大な輸送距離。大半が奢侈品や黒人奴隷。

### 3. ポトシ周辺部地域からの物資供給

1570年代には、ワンカベリカ産の水銀をポトシに運ぶためにチンチャ港～アリカ港経由の輸送ルートが開かれる（[地図2](#)/[付録1](#)）。ポトシへの主要な物資供給地は、原住民人口の密集したアルティプラノを基軸とする。品目：リヤマやアルパカ、ジャガイモ、キノア（キヌア）など。穀物、果物・野菜類、砂糖、綿布、ココなどの供給地は、コチャバンバ、チュキサカ、タリハ、オリエンテ（東部低地—その拠点はサンタクルス・デ・ラ・シエラ）、太平洋沿岸部（コスタ）やアンデス東部斜面の溪谷部。羊、牛、ラバなど家畜の供給地は現アルゼンチン北西部。

農牧畜産品や織物もポトシに送られた。

熱帯からの産物もポトシへ。現パラグアイはマテ茶を提供。

まとめ→供給品と供給地は[第3表](#)の通り。

1603年のポトシにおける食糧品をはじめ日用品の消費の記録：トップは小麦粉9万ファネガ。チチャ酒6万ボティハ（8リットルの容量）、ぶどう酒5万ボティハ、ココ6万かごなど（[第4表](#)）。ココはクスコ地域東部とラパス・ユンガスから供給。

第3表、第4表から品目を検討→生活必需品。

1603年におけるポトシ市場における食糧品をはじめとする生活必需品の年間売上額→食糧品のうち第1位は小麦粉（164万ペソ）。チチャ酒（102万ペソ）、ぶどう酒（50万ペソ）、ココ（36万ペソ）、トウモロコシ（28万ペソ）、ジャガイモ（12万ペソ）・チューニョ（保存食）（12万ペソ）・オカ（12万ペソ）、果物（11万ペソ）と続く。中でも小麦粉とチチャ酒が首位。

家畜：アルパカ（40万ペソ）、リヤマ（12万ペソ）、羊（10万ペソ）（食肉、荷駄用あ



るいは採毛用)。

帽子 (18 万ペソ)、リヤマ製の衣類 (13 万ペソ)。 (第 4 表)

#### (1) アルティプラノの中核—チュクイート地方

チュクイート地方はポトシ銀山の労働力需要やポトシ市場の商品需要に規定され、大規模な原住民労働力と生活必需品をポトシに提供。内外商品の輸送業務をも担う。

チュクイート地方 (地図 5) は、先インカ期においてはティワナク (ティアワナコ) 文化圏に、インカの時代にはコヤスーユに所属。〔古くは「ルパカ王国」と呼ばれた (アイマラ語圏)〕。

主要財源はリヤマやアルパカなど南米ラクダ科家畜。

生活必需品の多くをシエラ (アンデス高地) 以外の場所から調達。

西方の太平洋沿岸の河川の溪谷部に「列島入植地」(エンクラーベ=飛び地) を設け、そこからトウモロコシや小麦、綿花等を得ていた。

例：サマヤモケグアの溪谷部、アリカのリュタ溪谷。

東コルディレラ山脈の東斜面 (セルバ) にも入植地 (エンクラーベ) をもつ。コカをはじめ生活必需品を調達。

#### (2) アンデス東部斜面とアンデス西部斜面 (太平洋沿岸部まで)

《アンデス東部斜面の溪谷部》：コカに代表される。

クスコのユンカ地帯 (パウカルタンボ) とラパス・ユングス溪谷部。コカの商品化。

コカはポトシ市場において最大級の価値を有する商品。

《アンデス西部斜面 (太平洋沿岸部まで) の溪谷部》：ブドウ栽培が盛ん。ぶどう酒に代表される。

アレキパ地方やモケグア地方 (地図 1) ほか)。

#### 結び

ポトシ銀山を中核とする市場経済は、新大陸はもとより世界全体に大きな影響をもたらした。ポトシには世界中からありとあらゆる物資が集まってきた。太平洋沿岸およびラプラタ川方面経由によるポトシへの物資の供給品は、遠大な輸送距離を介するものであり、ポトシ市場において最大限の利益をあげることができる奢侈品や黒人奴隷。これに対して、ポトシ周辺部地域から供給された物資は、大半が生活必需品。16 世紀末から 17 世紀はじめにかけての、銀生産が絶頂期にあったポトシには 12 万人から 16 万人もの人々が暮らしており、消費される物資の規模も半端なものではなかった。

ポトシの銀鉱業は、私企業 (私人) とスペイン王権による官民混合事業。鉱山主は王権と協約を結び事業独占権を下付された。地方レベルで原住民を統治したのはコレヒドール (地方行政官。俗権レベル) 〔征服時代から植民地時代初期にかけては一般にエン

コメンデーロ (エンコメンデーロはコレヒドールのように行政官ではない。民間人であった) が原住民を支配]。コレヒドールは原住民共同体の首長であるカシケを介して原住民を統治。[教権]レベルでは司祭が原住民を支配。原住民共同体はカシケと共同体成員よりなったが、両者の関係は先スペイン期からの互恵的な伝統に基づいており、スペインによる支配体制とは質的に異なるものであった。しかし、とくにポトシ銀山のミタが植民地政府によって再編成され、富の獲得にむけて私企業 (私人) と王権が手を携えて疾走するのに伴い、カシケと共同体員の関係はこれまでにない変容を強いられていく。

「出世する原住民富裕層」の台頭に対し、他方で「逃亡する原住民 (フォラステーロ)」の増加という構図は、原住民社会変容の端的な表れ。

ポトシ銀山とその巨大市場の出現は、俗権のみならず教権をも巻き込んでいく。ポトシは、アメリカ大陸植民地のあらゆる人々、それに外国人にも影響を及ぼした。植民地時代の歴史の底流には常に「ポトシ」が存在していた。ポトシ産の銀の流出先としては、直接的には、第2表、第3表に示されている内外からの物資の供給地が挙げられよう。ポトシへの物資の供給地→ポトシ銀の流出先を示唆。

ポトシ市場を介して、南米大陸南部において太平洋と大西洋の交易ルートが繋がったのは1580年代以降のこと。

+++++

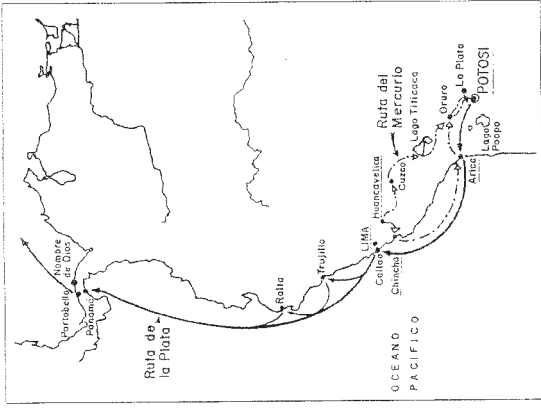
《主要参考文献》

- ・拙著『トゥパック・アマルの反乱に関する研究—その社会経済史的背景の考察—』神戸商科大学研究叢書 LI, 神戸商科大学経済研究所, 1995年
- ・拙稿「16世紀ペルーにおけるスペイン植民地支配体制の成立をめぐって」『人文論集』第39巻, 第3・4号, 神戸商科大学学術研究会, 2004年
- ・拙稿「植民地時代ペルーにおけるワンカベリカ水銀鉱山と水銀汚染問題—植民地時代前半期—」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』No.6, 京都外国語大学, 2006年
- ・近藤仁之『ラテンアメリカ銀と近世資本主義』行路社, 2011年
- ・拙稿「植民地時代前半期のポトシ銀山をめぐる社会経済史研究—ポトシ市場経済圏の形成— (前編) と (後編)」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』No.11, No.12, 京都外国語大学, 2011年, 2012年
- ・拙編著『ボリビアを知るための73章』明石書店, 2013年 (共著)



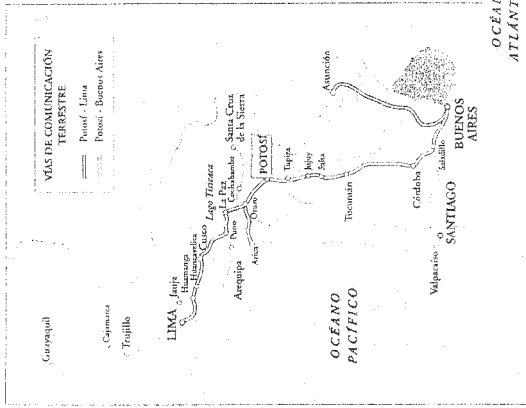
図表・資料 No. 1

地図2 パナマ地帯-太平洋沿岸一帯トシ

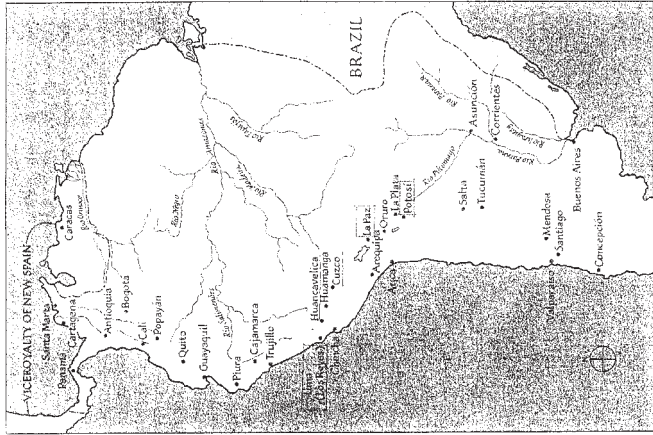


出所: Clara Lopez Beltrán, "Los caminos de la plata, el espacio económico", Juan Marchena Fernández (compilador), *Potosí: plata para Europa* (Sevilla: Universidad de Sevilla, Fundación El Monte, 2000), p.151.

地図3 リマ-ポトシ-ブエノスアイレス (ラプラタ川方面)



地図1 16世紀ペルー-副王領



出所: Jeffrey A. Cole, *The Potosí Mine 1573-1700* (Stanford: Stanford University Press, 1985), p.10.

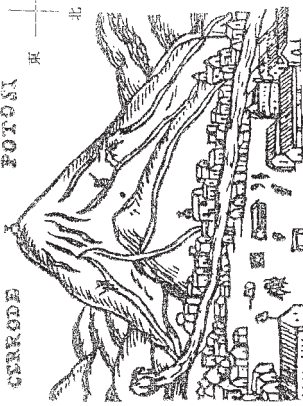
第1図 ハンカ(コロンチマダラ)



ブルガール、ヒタリによるペルーのB系帯区分。ペルーの地質学者ブルガール、ヒタリはペルーの東部を自然断層線をもつて2つの地帯に分けていた。まずアマゾン川までの地帯は、ポトシから300メートルまでの地帯、つぎにコロンチマダラまでの地帯である。ポトシは2,300-3,500メートルまでの地帯で、トゥモロコシ栽培の地帯である。3,500-4,000メートルはスニエラ地帯、ジャガイモ栽培地帯である。4,000-4,500メートルはアマゾン川とラタガ川の間の地帯である。ポトシは、東部の山脈の南端にあり、アマゾン川とラタガ川の間の地帯である。ポトシは、東部の山脈の南端にあり、アマゾン川とラタガ川の間の地帯である。ポトシは、東部の山脈の南端にあり、アマゾン川とラタガ川の間の地帯である。

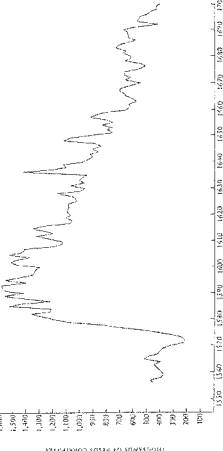
出所: マリア・ロストウオロフスキ (増田義昭訳) 「インカ国家の形成と崩壊」東洋書林、2003年

第2図 1550年、ポトシの街景 (ポトシとセロ・リコ)



出所: Juan Marchena Fernández, "Potosí: plata para Europa", *Potosí: plata para Europa* (Sevilla: Universidad de Sevilla, Fundación El Monte, 2000), p.41.

第3図 1565-1700年におけるポトシの標高の推移



出所: Jeffrey A. Cole, *The Potosí Mine 1573-1700* (Stanford: Stanford University Press, 1985), p.16/附圖 著 (2008年), 224頁。

図表・資料 No. 2

ボナンリア産銅山からの供給		供給先
品目	数量	
小麦	20,000 トン	ボナンリア、ベネズエラ、アルゼンチン、マダガスカル
豆	10,000 トン	ボナンリア、マダガスカル
砂糖	50,000 トン	ボナンリア、マダガスカル、ボネール、セイロン、コロンビア、トルコ、インドネシア、スマタラ
茶	20,000 トン	ボナンリア、マダガスカル
タバコ	10,000 トン	ボナンリア、マダガスカル
羊皮	10,000 トン	ボナンリア、マダガスカル
羊毛	10,000 トン	ボナンリア、マダガスカル
皮革	10,000 トン	ボナンリア、マダガスカル
金属	10,000 トン	ボナンリア、マダガスカル
絹	10,000 トン	ボナンリア、マダガスカル
布	10,000 トン	ボナンリア、マダガスカル
紙	10,000 トン	ボナンリア、マダガスカル
油	10,000 トン	ボナンリア、マダガスカル
酒	10,000 トン	ボナンリア、マダガスカル
食料	10,000 トン	ボナンリア、マダガスカル
医薬	10,000 トン	ボナンリア、マダガスカル
書籍	10,000 トン	ボナンリア、マダガスカル
美術品	10,000 トン	ボナンリア、マダガスカル
その他	10,000 トン	ボナンリア、マダガスカル

第3表

品名	数量	単位
小麦	100,000	トン
豆	50,000	トン
砂糖	200,000	トン
茶	100,000	トン
タバコ	50,000	トン
羊皮	50,000	トン
羊毛	50,000	トン
皮革	50,000	トン
金属	50,000	トン
絹	50,000	トン
布	50,000	トン
紙	50,000	トン
油	50,000	トン
酒	50,000	トン
食料	50,000	トン
医薬	50,000	トン
書籍	50,000	トン
美術品	50,000	トン
その他	50,000	トン

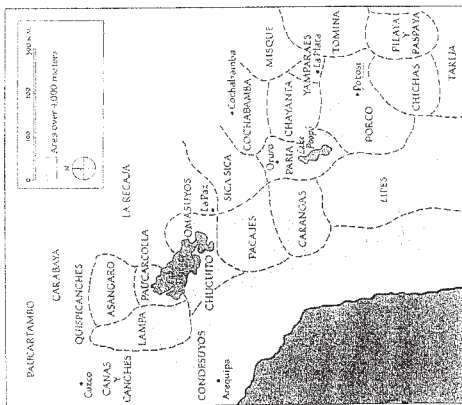
出所：Jeffrey A. Cole, *The Potosí Mita 1572-1700, Compulsory Indian Labor in the Andes* (Stanford: Stanford University Press, 1981), p. 17, pp. 74-76; Thierry Saignes, "Ayllu, mercado y comercio colonial al este de las altas montañas interandinas en Chacabamba siglo XVIII", en *La producción indígena en los movimientos andinos: estrategias y representación social siglos XVI y XVII*, por Orlina Harris, Brooke Larson, Enrique Iribarne, compiladores (La Paz: Centro de Estudios de la Realidad Económica y Social, 1987), pp. 149-153.

第2表

品名	数量	単位
小麦	100,000	トン
豆	50,000	トン
砂糖	200,000	トン
茶	100,000	トン
タバコ	50,000	トン
羊皮	50,000	トン
羊毛	50,000	トン
皮革	50,000	トン
金属	50,000	トン
絹	50,000	トン
布	50,000	トン
紙	50,000	トン
油	50,000	トン
酒	50,000	トン
食料	50,000	トン
医薬	50,000	トン
書籍	50,000	トン
美術品	50,000	トン
その他	50,000	トン

出所：Jeffrey A. Cole, *The Potosí Mita 1572-1700, Compulsory Indian Labor in the Andes* (Stanford: Stanford University Press, 1981), p. 17, pp. 74-76; Thierry Saignes, "Ayllu, mercado y comercio colonial al este de las altas montañas interandinas en Chacabamba siglo XVIII", en *La producción indígena en los movimientos andinos: estrategias y representación social siglos XVI y XVII*, por Orlina Harris, Brooke Larson, Enrique Iribarne, compiladores (La Paz: Centro de Estudios de la Realidad Económica y Social, 1987), pp. 149-153.

地図4 18世紀ウルトゥベールのボナンリア産銅山周辺のミタを制定された諸地域 (地方)



出所：Cole, op. cit., p. 11.

地図5



出所：船橋 (1995年), 21頁.

品名	数量	単位
小麦	100,000	トン
豆	50,000	トン
砂糖	200,000	トン
茶	100,000	トン
タバコ	50,000	トン
羊皮	50,000	トン
羊毛	50,000	トン
皮革	50,000	トン
金属	50,000	トン
絹	50,000	トン
布	50,000	トン
紙	50,000	トン
油	50,000	トン
酒	50,000	トン
食料	50,000	トン
医薬	50,000	トン
書籍	50,000	トン
美術品	50,000	トン
その他	50,000	トン

第4表 17世紀におけるボナンリア産銅山の供給先 (1693年)

出所：Jiménez de Espasa, op. cit., pp. 125-132 / その他, Escobar de Quevedo, (1965), op. cit., pp. 42-43 参照.